下八釣町（しもやつりちょう）

衣装織り縫った渡来人

八釣（やつり）を土地の人は、古代から中世まで八釣（やとり）と呼んでいたことが、古い文献に出ています。

江戸時代の国学者、本居宣長の旅日記に「やとり村といふあり、文字には八釣とかけば―」とあることからも、このことが分かります。この呼び方は、古代職業名の漢織（あやはとり）を簡略したものだとする説があります。漢織は呉織（くれはとり）とともに衣縫部（きぬぬいべ）と呼ばれ、古代朝廷の衣装一切を織り縫っていた渡来人の高級技術者集団でした。

日本書紀・雄略記の記録に「飛鳥衣縫部」とあり、古事記・顕宗段に「近飛鳥（ちかつあすか）八釣宮」と出ているほか、万葉集にも「八釣山」などという、数々の用字が出てきます。

このようなことから古代、天香久山の南と北に「八釣」と呼ぶ地域があり当時、衣縫部の人たちが住んでいたこと、さらに南を「近飛鳥」と呼び北を「下八釣」としたことも、明らかになっています。

天香久山の「土霊」を祭るとされる畝尾坐健土安（うねおにますたけはにやす）神社と、近隣で有名な八釣の地蔵さんを祭る八釣山・興福寺も同町にあります。